

誕生日に夫が発見、授乳期間中に27才で切除。 いまや23人にひとりが罹る乳がんで、 失ったのは乳房だけじゃなかった…



三好さんが乳がんの告知を受けたのは、長男・優生くんを出産した約9か月後だった。

転載・二次使用禁止

「右のおっぱいを全部取ることになると思います」——しこりを発見してわずか3日後の告知を受けたときは、あまりに突然すぎて、言葉も出なかった。がんに罹ったこと以上に、長男の授乳中に乳房を取らなくてはいけないことにショックを受けた。あれから2年。失われたものと手に入れたもの——彼女の闘いはこんな風に始まった。

「桜島は人間に勇氣と力を与えてくれる」

古くから薩摩に伝えられるこの言葉は、病魔と闘う人々をどれほど励ましたことだろう。鹿児島市内にある相良病院の屋上テラスからは、そんな桜島の雄姿が一望できる。この病院は乳がん手術数が年間400例近い実績を誇る全国屈指の乳がん専門病院である。

平成9年3月、リニユールされた院内には、髪を整えたりメイクもできるドレッサールーム、病院とは思えない洗練された明るい食堂、患者やその家族が誰にも邪魔されずに話したり泣くこともできる「心の部屋」など、女性に対する配慮が至る所に見受けられる。

ホテルのような1階受付から2階に上がると、乳がん患者の会「つどい いずみ」のサロンがある。相良病院で乳がんの手術を受けた患者同士が互いの悩みや喜びを語り合える場を設けてほしいという希望に応え、20年前に結成された。泉のように風まきることなくあふれ出る生命力であってほしいという願いから「いずみ」と名づけられた。温かみのある木目の室内にはいると、中央に置かれたテーブルでは、バジヤマ姿や普賢有姿の女性たちが、花柄のカーテンから差し込む日の光に包まれ、談笑していた。しかし、なかには暗い表情を浮かべる女性の姿もあり、ここは乳がん患者たち

誰が食べたの？



お母さんのおっぱい

体験者たちが悩みを語り合ったり、入院中の患者にアドバイスすることが、心のケアにつながっている。



「つづい、いずみ」では、摘出手術を受けた女性用のパッドも販売している。



乳がん体験者のボランティアによって手作りされる、乳房用パッド。

「いずみ」の活動は多様である。入院中の悩みや不安にこたえる病室訪問、下着相談、かつら相談、乳房の摘出手術を受けた女性のための手作りパッド製作、外来患者へのお茶のサービスなど、医師だけではケアできないさまざまな問題を解決するために、乳がん経験者のボランティアにより支えられている。

鹿児島県在住の三好綾さん（29才）の元氣な姿を目にしたのも、このサロンの一角だった。三好さんに運命の目が訪れたのは27才の誕生日。當時は、夫の仕事の関係で、鹿児島島の離島で生活していた。建築関係の仕事に就く夫と、今年3才になるひとり息子の優生くんと3人、美しい海に囲まれた穏やかな暮らし

だった。「しこりを発見したのは主人なんです。両方のおっぱいが張っていたのですが、授乳のせいだと思っていたんです。痛みはまったくありませんでした。でも、右のおっぱいの出が悪かったんですよね。主人にいわれて脇のところに熱してみたら、こるこるっていう、ちょうどピンポン玉のようなしこりがあったんです」

三好さんはすぐに、地元病院を訪れた。視触診、エコー（超音波検査）の結果、マンモグラフィ（乳房エックス線撮影）と細胞診が必要ということだ。鹿児島市内の病院を紹介さ

れた。しこりに注射器の針を刺して吸引した細胞を乳頭の分泌物に含まれる細胞を顕微鏡で調べ、良性か悪性かの診断を下すためだ。

「パソコン世代なんです」と語る三好さんは、病院から帰宅して早速パソコンに向かった。しこり、二十代……インターネットで検索するとヒットしたのは、1件だけだった。

「やはり、27才でおっぱいを取りました」という日記の1ページだったと思えますけど、そのときは他人ごとで、私は乳腺症や乳腺繊維腫瘍という良性のしこりなんだと思っていました」紹介された鹿児島市内の病院には、隣町に住む母も同行してくれました。しこりを発見して3日後のことだった。検査が終わわり、優生くんを抱き、母とともに診察室に呼ばれた。

「リンパに転移している可能性がありまので、右のおっぱいを全部取ることになると思います」

医師からの告知は本人より、むしろ母に衝撃を与えた。母はその場で泣き崩れた。

「告知されたのは私なのに、母の肩をたたきながら、大丈夫、大丈夫、しっかりして、って、逆に母を励ました。私にしてみれば、エッ、おっぱいを取る!? 誰のことですか、って、聞き返したい気持ちでした」すぐに夫に電話を入れた。

「結果はどうだったと聞くので、がんだったのよ」といったら「またー、って。本当よ、っ」

告知を受けた日から三好さんは日記を綴り始めた。そのなかで、このときの心境をこう綴っている。

「病院を出るとこれでもかといいうくらいにいい天気。不思議だ。ここに、たった今、がん。だと告知された人間がいて、それでも世の中は何一つ変わらさず動いている。太陽だって燦爛と降り注いでいる。自分だけがボツンと取り残されて時間が過ぎていようだ」

島から鹿児島までは高速度で1時間30分ほどかかる。その晩、実家に駆けつけた夫と、優生くんを挟んで床についた。三好さんはそと夫に手を伸ばした。ギョツと握り返してくれた夫の手はぬくもりを感じた瞬間、涙があふれた。

「ショックとか不安っていうのはじわじわと後からやってくるものなんですわ、本当に」再びインターネットで乳がんについての情報を検索。「セカンド・オピニオン（患者が主治医以外の医師に意見を求めること）」の文字が飛び込んできた。「初めて聞いた言葉だったので、がん、ってひとつの病院だけではいけないんだ。とにかく、乳がんの専門病院を探さな

ていたら、黙ってしまっって」沈黙を破ったのは、夫だった。「船が取れたらすぐ行くから」

きやって思っ。それで、インターネットだけじゃなく、いろんな友人や親戚に電話もしました。もしかしたら、おっぱいを取らなくてもいいかも、本当は「がん」じゃないかもって」

たまたま、おばが検診を受けている病院が相良病院だった。三好さんの行動は早かった。翌日、相良病院に向かった。今度は夫もついてきてくれた。

「前の病院と同じ検査を受けましたが、結果は同じ。2回目の告知でした。でも、違ったのはおっぱいを再建する方法を教えられました。前の病院では、ただ、おっぱいを切る」としかいわれませんでしたから。それに、そのころふたりめが欲しいなって思っていたんです。そのことも先生に相談したら、再発のリスクはあるけど、おっぱいを取ったからといって赤ちゃんがつかれなくなることはないよ、って。何かこうほっとしたというか、もしかしたら、大丈夫かもって。そのとき、もう貴

告知の翌から10日後に全摘手術を

「結果はどうだったと聞くので、がんだったのよ」といったら「またー、って。本当よ、っ」

告知を受けた日から三好さんは日記を綴り始めた。そのなかで、このときの心境をこう綴っている。

「病院を出るとこれでもかといいうくらいにいい天気。不思議だ。ここに、たった今、がん。だと告知された人間がいて、それでも世の中は何一つ変わらさず動いている。太陽だって燦爛と降り注いでいる。自分だけがボツンと取り残されて時間が過ぎていようだ」

島から鹿児島までは高速度で1時間30分ほどかかる。その晩、実家に駆けつけた夫と、優生くんを挟んで床についた。三好さんはそと夫に手を伸ばした。ギョツと握り返してくれた夫の手はぬくもりを感じた瞬間、涙があふれた。

「ショックとか不安っていうのはじわじわと後からやってくるものなんですわ、本当に」再びインターネットで乳がんについての情報を検索。「セカンド・オピニオン（患者が主治医以外の医師に意見を求めること）」の文字が飛び込んできた。「初めて聞いた言葉だったので、がん、ってひとつの病院だけではいけないんだ。とにかく、乳がんの専門病院を探さな



年間400例近い乳がん手術の実績を誇る相良病院。

抗がん剤治療の合間に、家族で東京ディズニーシーへ。かつらと帽子を被って



悟を決めようと思いましたが」
手術前の検査が終了した日、三好さん夫婦は、両親の計らいで水入らずのデパートに出かけた。そして、心にわだかまっていたことを、帰りの車の中で夫に告げた。

手術後、島で生活する自信がないこと、優生くんの世話をひとりではできないこと、しばらく実家に住みたいこと、夫も働いてほしいことを伝えたが、彼の答えは三好さんの期待に反するものだった。

「仕事を辞めたら生活ができない。しばらくはお前と優生だけ実家に帰って、治ったらまた島で暮らせばいいじゃないか」
いつの間にか楽しいはずのデ

手術1か月後。「思い出を作ろうと、よく出掛けました。」



手術は無事終わった。27年間、普通にあったおっぱいが、ある日境界に急になくなってしまった。女性の証でもある胸の膨らみが消えてしまったショック。それ以上にショックだったのは、授乳期間中だったこと。1才に満たない優生くんからおっぱいを奪ってしまふことが辛く、乳房を失ったことによる喪失感は、あまりにも大きかった。

手術は直後は包帯を巻いているので、おっぱいがべったんこなんて、あまり分らないんですね。でも、だんだん包帯が薄くなってガーゼ一枚になってくると、べったんこなのかわかりますよ。それで、ああ、ないんだ、って。シャワーを浴びるときも、見られませんでした。というか、見たくないんです」

術後、個室での生活が始まりました。毎朝、病室の窓から、そと町並みを眺めたが、そこには、人間が普通な日常があった。そして乳がん患者の治療に携わってきた相良

長年、臨床医として乳がん患者の治療に携わってきた相良

15年後には20人にひとりになるというデータも

「初診から手術までの時期、手術前後、退院後、再発への恐怖、不幸にして再発してしまつたとき、その時々々の状況で患者さんの心の動揺は微妙に違ってきます。特に乳房を摘出しなければならぬ患者さんは、女性のボディイメージを喪失することにより、女性ではなくなってしまうのではないかと、夫との関係がどうなるのか、などといった不安が残ることになります。そのためにも術前、ご主人へのインフォームドコンセントが大

切です。ご主人にも少しでも心構えをしていただくわけですよ」

日本人女性の乳がん罹患率は20年前に比べると約2倍、年間約3・5万人が発症し、約1万人が命を失っている。この数字が意味するところは、実に日本人女性の23人にひとりの割合で、発症しているということだ。15年後には、20人にひとりになるといふ予測データもある。前出の相良氏は、乳がん増加の原因をこう分析する。

「初潮年齢が下がり、閉経年齢が高くなったこと。少子化により、出産回数が減つたこと。女性の晩婚傾向で、最初の出産が高年齢化したこと。食生活の欧米化に伴い脂肪の多い食事が増

て、三好さんがこれまで感じたことのない感情が、沸々とわき上がった。

「病院の前を普通に、元気に歩いているのが朝、歩いて出動していくのが見えるんですよ。」

多分、この人たちは普通においしいちゃん、おぼあちやんになれるんだって。もしかしら、自分ではなれないかもしれないって思うと不公平というか、もう、メラメラと嫉妬感が芽生えて。特に同じ世代の女の人を見ると、ああ、幸せそう、だなって」



生まれて間もない優生くん、三好さんが右のおっぱいから授乳する姿を写した一枚。三好さんの宝物だ。

最近の統計では、手術治療のうちの約4割が、乳房温存手術だという。



らです。エコーで異常が発見された場合、マンモグラフィの検査を併用します。

大切なのは、常日頃の自己検診です。しこりがないか、乳頭からの出血や血のまじった分泌物がないか、脇の下にぐりぐりしたしこりはないか。この3つが大きなポイントです」（前出・相良氏）

乳がんに対する治療法を大別すると手術療法、薬物療法（抗がん剤などの投与）、放射線療法（3つがある。手術療法には胸筋だけを残して乳房を全摘する乳房切除法としこりだけを切除して乳房を残す乳房温存法があるが、3センチ以内のがんの場合、乳房を全摘しても、温存しても予後は全く変わらないというデータが欧米での臨床試験から判明し、日本でも約4割は温存手術になったという。

「リンパには見張り番の役をするセンチネルリンパがあります。最近はこの見張り番リンパに転移がなければ、リンパを取らない方法も行われています。リンパ切除を避けられるので、手のむくみなどの症状が表れるリン

パ浮腫を防ぐことができるのです。

しかし、いちばん大切なことは早期発見、早期治療です。がんが乳管にとどまっている段階のゼロ期であれば、100%近く治りますし、しこりが2センチ以下で、脇の下のリンパ節に転移していない第一期でも、90%は治ります」

と、同病院副院長の雷哲明氏はいう。

一方、医学がいかに進歩しても、使いこなす医療者側のスキルや資質が向上しなければ、患者にとっては逆効果になると危

がんは手術が成功したら、それで終わりという疾患ではない。むしろ、術後の治療から、本当の意味でがんとの闘いが始まる。三好さんに与えられた試練は抗がん剤だった。吐き気、発熱、脱毛などの副作用に苦しんだ。「お風呂の鏡で、髪もなくておっぱいが片方ない自分の姿を見



20、30代は視触診とエコー（超音波検査）(E)、40代以上はマンモグラフィ（M）と視触診が有効といわれている。

「傷跡に手をあてて」「かわいそうにな」と呟いた

たときは、がく然としました。私、本当に病人なんだって。」さらに、リンパ浮腫で手がむくみ、優生くんも抱っこしてあげられない。月々6万3000円もかかる抗がん剤の治療費。右胸の乳房切除と同時に、乳房再建のため皮膚の下に入れた生理食塩水（エキスパンダー）が

体に合わず、取り出す手術も受けた。がんは患者や家族を、これでもか、これでもかと精神的、経済的に追い詰める。「自分が病人なんだって実感するのは抗がん剤の治療中からなんです。だって、それまでは痛みも何もなかったか

た。「最初は夫婦間のそういうことも、もうないのになって思いました。おっぱいが片方しかない人となんかしたくないかな、とか。いまでもテレビで胸を強調した女性タレントなんかを見ると、やっぱり主人もおっぱいが両方あったほうがいいのかな、なんて思ったりします。着替えるときも、堂々というわけにもいれないし」

さらに、乳がんを経験したこのない人たちのギャンプを感じることもしなくなかった。「退院して、これから抗がん剤治療というときに、同世代の友人から、よかつたね、治ったんでしょ、って。病気は退院したら治るものと思われているけれど、がんは違う。5年、10年と見ていかなくちゃならない病気で、再発の恐怖だって常につきまとう。正直、10年後にはマイホームなんて話をされても、10年後はどうなっているか、自信が持てないんです。

それに、みんなで露天風呂に行こうなんて盛り上がりつついても、私は違うんだって思ったり

そんな妻の気持ちを知った夫は、三好さんの要望を受け入れ、島での仕事を辞めて一緒に夫家に住んでくれることになった。そして、勇気を持って初めて傷跡を見せるとき、夫はそっと手をあてて、「かわいそうにな」と呟いた

「夫には3つタイプがあると思います。ひとつは100%理解して応援してくれるタイプ。2つ目は理解したり理解できなかったり。そして3つ目は、主人が奥さんの気持ちを受け止められないタイプ。この場合は、夫が妻をケアしきれないことがつらくて離婚してしまう場合もあるし、妻側が同情されるのはいや、とか、家族の負担になるのはいや」と夫を拒絶してしまふ場合もあります。お互い嫌いになって別れるんじゃないんです。やっぱり、がん患者が家庭



相良病院院長の相良吉厚氏(上)と副院長の雷哲明氏(下)。

わが時代の

にいてるということとは簡単なことではないんです」

患者会より、むしろ、患者の夫の会。『家族の会』が必要と訴える人もいた。夫や家族の精神的なケアをしなければならぬ時代にきている。また、ある会員はこう語る。

「乳がんになったことで、夫婦のあり方がすごくわかりました。私たちが、こういう間柄だったんだっていう」

三好さんの夫は「理解したり、理解できなかったり」というクイズだという。

それでも、乳がんということ、周囲から必要以上に気を使われてしまう三好さんにとって、夫は病気のことで唯一怒ってくれる存在だという。

「弱気になったり、病気を盾にわがままをいったりするときもあるんですが、主人だけです、怒ってくれるのは」

そして、何より優生くんの無邪気な笑顔に励まされてきた。こんなことがあった。優生くんとお風呂にはいったときのこと。

「お母さんのおっぱい、誰が食べたの？」

突然、優生くんが聞いた。実は、その数日前、三好さんの母親とお風呂にはいった優生くんは、不思議そうにおばあちゃんのおっぱいを眺めていたという。

いままで三好さんとお風呂にはいつていた優生



「2004 ピンクリボン in Kagoshima」のイベントに参加する三好さん親子。

くんは、おっぱいはひとつと想っていた。なのにおばあちゃんには左右、ふたつのおっぱいがあった。

「うん。お母さんのおっぱいね、ワニに食べられちゃったんだ」

『家族にも先生にもいえないこと』がいのばいある

そして、もうひとつの精神的な大きな支えになったのは、こ

は年間2回の旅行がある。初めて参加したとき、バスの車内でひとりひとり自己紹介しながら体験談を話すコーナーに耳を傾け、深い感動を覚えた。

「悲しい思いをしているのは自分だけだと思っていたんですが、みんな、みんな、悲しい思いをして、ここまでたどり着いてるんだと思いました。最初は週1回だけ顔を出す程度だったんですが、それだけじゃ済まなくなってきた、いまでは土日以外

はほとんど毎日(笑い)。
「こでしかいえないことってたくさんあるんです。家族にも先生にも、看護師さんにもいえないことが、いっぱい、いっぱいあるんです。やはり、同じ思いをした人じゃないとわからないことがたくさんある。私にとって、こは生きがいです」

三好さんは現在、自身のホームページを立ち上げた実績を買われ、患者会のホームページ作成も担当している。
乳がんの末期患者との出会いも三好さんを大きく変えた出来事だった。

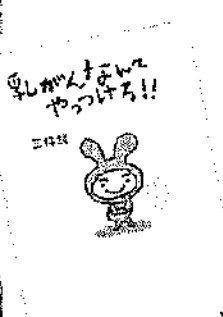
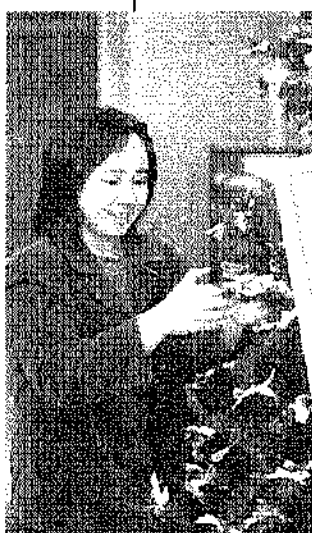
「残念ですけど、亡くなる人もたくさんいます。最初は怖くて避けていた部分がありました。よく患者会に顔を見せていた末期の患者さんが寝たきりになったという話を聞いて、病室までお見舞いに行った

んです。背中が痛い、というので、ずつと背中をさすってあげたんです。

いまでも忘れられないんです、その背中があったかさが。そのとき、やつと何か、人が死ぬことっていうのを受け入れられたんだと思いました。いまでは自分の姿と重ね合わせて、すごく怖かったのに」

04年12月、テレビで「つどい いずみ」が紹介された直後には、すさまじい反響があった。「県内外からの電話がずつと鳴りっぱなしでした。受話器をあげた瞬間に泣きながら、自分の置かれた状況や病院の実情を訴える患者さんいました。こんなにも精神的なサポートを求めている患者さんが大勢いるんだと改めて実感しました」

と、「つどい いずみ」事務局長の池田樹子さん(69才)はいう。
夫、家族、友人、医師……乳がん患者がかかわる



02年、闘病中の日記をもとに綴った著書『乳がんなんてやっつける!!』(新風舎刊)を発表。

人間関係も美にさまでした。こ
うした環境の違いによって、患
者ひとりひとりの立場や心理が
微妙に変化するの当然である。
患者のQOL（クオリティ・
オブ・ライフ）を高めるのもこ
うした人間関係だといえる。

三好さんは退院証明書に片隅
に書かれた担当医師のコメント
を見て、涙した。たつた一行に
込められた医師の思い。そこ
はこうあった。

「完治するまで頑張りまし
う」

三好さんは乳がん撲滅を訴え
るピンクリボン運動にも積極的
にかかわっている。ピンクリボ
ンとは、乳がんの早期発見、早
期診断、早期治療の大切さを伝
える世界共通のシンボルマーク。
8人にひとり乳がん患者とい
われるアメリカで、遺族のひと
りがこの悲劇を繰り返さないた
めという願いを込めて作ったピ
ンクリボンが始まりだという。

昨年、『ピンクリボンフェス
ティバル 2004』が東京で
開催され、三好さんは上京した。
さまざまな催し物のなか、東京
タワーがピンク色にライトアップ
された光景は、いまでも心に
焼き付いている。周囲の人々が、
大騒ぎしながら携帯電話で写真
を撮っているなか、六本木ヒル
ズからピンク色に染まった東京
タワーを見て、あふれる涙を止
めることができなかつたという。
「あんなに大きい東京タワーが

乳がん撲滅のために、ピンク色に
染まっていた。

でも、なんでピンクなの？
って聞いている人も大勢いて、
「ピンクリボンは乳がん撲滅の
意味よ、って教えてあげたかつ
た。」

それから、ますますピンクリ
ボンへの思いが募りました」

その後、三好さんの思いは、
鹿児島で開催された『2004
ピンクリボン in Kagos
hima』乳がん撲滅の思いを
南の風にのせて、につながつ
た。これまで、ピンクリボンの
イベントは東京、大阪、福岡な
ど大都市では開催されていたが、
地方都市では初めての試みだつ
た。

そこには、はつらつとした三
好さんがいる。

「つどい、いずみと」やピンク
リボン運動を通して、多くの人
と出会い、乳がんと闘う勇気と
生きがいを得た。多くの友人も
得た。

活動が忙しすぎて、ときには
喧嘩もするが、夫は何よりの心
の支えだ。

「私、乳がんになってよかつた
と思うんですよ。世界が変わつ
たし、人との出会いもいっぱい
もらつた。」

もし乳がんになつていなかつ
たら、こんなに成長できなかつ
たんじやないかしら。辛いこと
もいっぱいあつた。でもいま、
すごく楽しいんですよ」